

ビジネスマナーとして 引いたら足す、 プラマイゼロの 服装術を。

すでに当たり前のように私たちが着てきたスーツですが、振り返れば日本における洋装の歴史はわずか150年ほど。もともと欧州の寒い国で生まれた衣服を、日本の暑い夏に適用させることには無理があるかもしれません。日本らしい夏のビジネススタイルを、ちゃんと考えなければいけない時期に来ているといえるでしょう。そこであらためて、スーツの歴史やグローバルスタンダードを踏まえながら、日本のクールビズについて考えてみたいと思います。

「ネクタイをはずして通勤せよ」——そんなクールビズ慣行令に戸惑っている方も多いことと思います。会社によってはノータイ通勤の通達が出されるところもあるようですが、ネクタイをはずせばそれでOK、という簡単なものではないかもしれません。

街でたまにネクタイをはずしただけのビジネスマンを見かけると、気持ちしがほんでしまいませんか。スーツのズボンをはいて、そ

のままシャツを合わせるという、単にネクタイを省略したスタイルでは、ビジネスの相手にも失礼になつてしまうと思うんです。

そこでまず提案したいのは、ネクタイをはずしたら何か代わりにプラスする。プラスマイナスゼロの服装術です。ネクタイの代わりに例えばピンブローチを胸元に着けるとか。あるいは胸元にポケットチーフを挿すのもいいと思います。また上着を脱いだら、代わりに薄いベストを足してみるのも身が引き締まって見えてすてきです。

私たち日本人は、お客さまをお茶でもてなす際にも、器や演出に心配りをプラスしますよね。同様



ソーシャルウェアとしての夏の装いを検証

クールビズ、再考。

今年もクールビズの季節がやって来た。しかし情報やマーケットに惑わされて、ビジネスの基本を忘れてはいないか？ そこでクールビズという装いについて、服飾の歴史と経済の観点から明治大学特任教授の中野香織さんにインタビュー。

photographs:Takao Ohta
interview & text:Michiyo Azuma/Purple Phrase
illustration:Takashi Kuwahara
cooperation:implicito tel.03-5774-4433

自己演出のために

ネクタイは 威厳の象徴であり、 姿勢を正すもの。

服飾史の観点からスーツを振り返ってみると、実は意外なポイント

にビジネススタイルにも、何かプラスしてすがすがしい身なりを演出する心の余裕が欲しいものです。

トが見えてきます。

日本が西洋に倣って洋装を取り入れたのは今からおよそ150年前。当時、政府内で閣議が行われ、世界を征服するために世界で採用されている服を着ないといけないという思想の下、まず軍服に洋装が採用されたそうです。スーツというのは動きやすく、また威厳のある衣服で権威者にふさわしいという点も、採用された理由の一つでした。

そんなスーツの威厳の象徴となっているポイントが首元です。一方、クールビズで一番問題となっているのも首元のネクタイですよね。ネクタイのお陰で暑さが増すと思われがち。

そもそも、なぜ首を飾る必要があるのか？ これにはルネサンス以来の深い理由があります。当時、貴族たちは首を固定するカラーを付けていました。なぜなら、首をふらつかせないことで感情を表に出さず、かつ威厳を見せることができるからです。当時の肖像画を見ると、確かに首に装飾をして顎をグッと上げています。

またネクタイの起源は、ルイ17世の時代にまでさかのぼります。当時クロアチア人の雇い兵たちが戦に勝って宮廷に凱旋してきたときに首に巻いていた布がカッコよく、兵士のプライドの証であるその布を国王や貴族たちも巻いて

みようと始めたのがクロアットであり、後のクラバット（仏語でネクタイ）の語源になっています。

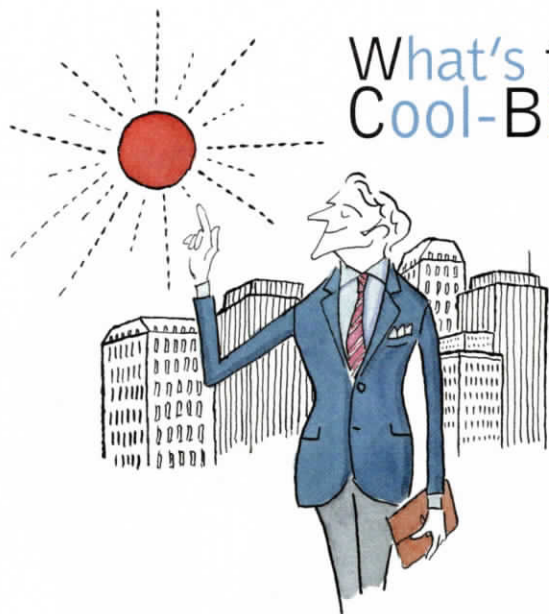
つまりスーツにおけるネクタイは、威厳やプライドの象徴であり、姿勢を正すという機能的な役割をも担っていたことを歴史は教えてくれます。確かにネクタイを締めることで、スツと首が伸びて姿勢が矯正されるところがあるかもしれませんがね。逆にネクタイをはずしたら、ガクッと姿勢が緩んでしまう人が多いのも問題。ノータイでいくなら、姿勢を意識することが大切です。そうでなければタイドアップして姿勢を正すほうが、ビジネスにおいてはスマートな戦略といえそうです。

スマートスタイル 機能素材や涼感素材を活用し、 ドレスアップ。

クールビズを取り入れることで仕事の業績が上がるかどうか？

これについてはさまざまな議論がありますが、米国のある調査結果によれば、服装をカジュアルダウンしたから数字が上がる下がる

What's the Cool-Biz?



ということではなく、装いに変化したときには一瞬、新鮮さが功を奏するか、数字が上がるという効果はあるそうです。その変化の効果にあやかろうというトレンドは生まれますね。例えば軽装で仕事が許されるシリコンバレーが脚光を浴びた2000年くらいからカジュアルダウンは浸透し、2008年リーマンショックの後にはネクタイをしきちんと装ったほうが雇用と社会的信用につながりやすいため、ドレスアップしようという動きがあつて、去年は3ピースのトレンドがありました。

では、日本ではどうすればいいのでしょうか？ 高温多湿という環境に加え、節電という課題もあ

「ネクタイを省略しただけのスタイルでは、ビジネスの相手にも失礼になってしまう」。

ります。クールビズでそれらを乗り越えるための努力が求められています。幸い日本にはアパレルメーカーの技術開発によって、通気性に優れた機能素材や、涼感素材などを使った進化したスーツがあります。こういうものを活用しない手はないでしょう。またシアサツカーなど、トラディショナルな涼感素材のジャケットを、ビジネスでもタイドアップしてさらりと着こなせたらお洒落ですよね。シャツ一枚で涼やかに過ごすの

なかの・かおり
東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得。英国ケンブリッジ大学客員研究員などを経て、文筆業に。現在は明治大学特任教授も務めている。著書は「モードとエロスと資本」(集英社新書)、「ダンディズムの系譜 男が憧れた男たち」(新潮選書)、「愛されるモード」(中央公論新社)、など多数。「GQ」(コンデナスト・パブリケーションズ・ジャパン)、「サライ」(小学館)、ウェブマガジン「OPNERS」(<http://openers.jp/>)にも寄稿している。



もいいですが、できればビジネスシーンではこうした機能素材などを利用してドレスアップを楽しんでいただきたいと思うのです。

クールビズは、どんどんカジュアルに移行していつては許される範囲とそうでないところもあつて、見極めが難しいのも事実。なし崩し的にカジュアルダウンするのではなく、時と場合によってはジャケットを羽織り、きちんと装う余裕も大事でしょう。ビジネススタイルというのは、相手の気持ちに込めることが基本にありますから、そこを忘れずに。

英国紳士の鉄則として、ビジネスでは顔と手以外は肌を見せてはいけないというのがあります。せめて上着を脱いだとき、お尻がだらしなく見えないように、スーツの組下じやなく、ちゃんとしたパンツを選んでよくようにする気配りも必要では。さもなくば上着で尻を隠したほうがスマートです。

最後に、クールビズの装いの秘訣を挙げるとしたら、やっぱり姿勢です。どんなにカジュアルダウンした装いでも、姿勢がシャンとしていればすてきに見えます。

クールビズというのは、決してリラックスすることや、着崩すことではないんです。上着を脱いだときこそ、ビジネスという気構えを失わず姿勢を気づかうことが何より大事ではないでしょうか。